

ベルク本郷ツアー、雨中に完全実施

1 ヶ月足らずで都市読み解き資料集を制作



オギュスタン・ベルク博士来学を契機に、西村教授の提案で立ち上げたベルク本郷ツアーチームは、1 ヶ月足らずで『本郷台地の都市空間—東大本郷キャンパス周辺まちあるき資料集』を仕上げ、12月4日(日)雨のなか十数人が参加し、ベルク博士とまちあるきを完全実施した。西村提案があったのは、10月25日の冬学期第1回研究室会議で、こうした都市の読み解きを毎年行うことが宿願だったという趣旨だった。11月4日に4班が編成され、現地調査とミーティングと徹夜作業の上に成果を問うた。班別は最終的に菊坂町・真砂町、森川町・台町、西片町、東片町・追分町となり、昼食会は江戸金魚老舗経営のレストラン「金魚坂」で行われた。

まちあるき風景



資料集表紙



リハーサル

菊坂町・真砂町界隈 菊坂町、真砂町は、本郷台地とその谷間が作り出す「地形」の上に立地している。私たちは、その地形がいかに現在のまちの形を規定しているかをテーマに、ベルク先生をご案内することとした。「金魚坂」での昼食の後、雨は一向に止む気配を見せない。降りしきる中、台地の谷間にかつて流れていた川、地形に呼応して色々な表情を見せる坂を、井戸のある路地等にご案内した。ベルク先生が、私たちの説明に一つ一つ丁寧に「はい」とうなずかれていたのが印象的だった。(鈴木智香子)

森川町・台町界隈 テーマは「見え隠れする領域」。森川町はもと岡崎藩本多家下屋敷であり、明治期の街路形成に際し屋敷内の映世神社(戦後廃社)が焦点となった。まずは門前に形成された商店街「宮前通り」から神社跡へ。続いて屋敷境界のクランクを抜け、江戸期の骨格を継承しつつ町屋敷から旅館・下宿街へと変容した台町、さらに寺の移転後に道が段階的に造られた旧日本妙寺境内を進むと、門跡付近に現れる崖線が菊坂町との境界を示す。(永瀬節治)

西片町界隈 西片町は、幕末に備前福山藩中屋敷があり、明治以降徐々に借地・借家開発された。台地の上の閉鎖的な屋敷地であったが、周囲の町と結ぶための坂や橋が作られ、徐々に開放された。かつて表門があった場所から坂を上り、阿部氏のお屋敷の名残りの木や不思議な形状の交差点、明治・大正築の立派な住宅などを眺め、明治以降に開発された普通の住宅地にも、地形や開発の歴史によって面白い場所が残っていることを感じた。田口卯吉旧居の内部を偶然見学できる幸運にも恵まれた。(田中暁子)

東片町・追分町界隈 東片町・追分町は中山道と御成道に挟まれ、他の町との関係が薄い。中山道沿いは江戸期から町人地で表には町屋が、路地を入ると長屋が建ち並び、表裏の対照的な空間が面白い。二街道に挟まれた部分は、主に中央南北に伸びる道と路地から造られている。明治以降に敷地の分割と統合が行われたが、組屋敷の面影が今でも感じ取れる。追分の高崎屋屋敷地は、明治以降に細分化され、特徴のある街路網と住空間が発生した。特に戦後に造られた外庭は珍しく興味深い。(後藤健太郎)

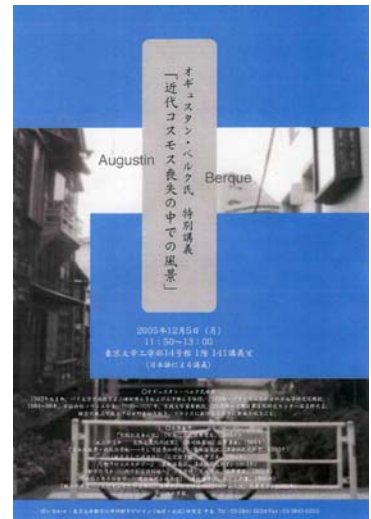
オギュスタン・ベルク特別講義、満席の聴講者に感銘

——「近代コスモス喪失の中での風景」

地理学・日本学の権威オギュスタン・ベルク博士の都市工学科の特別講義「近代コスモス喪失の中での風景」は、西村幸夫教授の方針により12月5日(月)正午から1時間、14号館141講義室で満席の受講者を前に行われた。西村教授の開講あいさつ、都市デザイン研究室OBでベルク教授のもとで都市学博士号を得た鳥海基樹首都大学東京准教授のベルク紹介に次いで、近代超克への思索を展開した講義があった。



満席 ベルク・フランス国立社会科学高等研究院教授・国際日本文化研究センター外国人研究員の特別講義(141講義室)



学内ポスター(永瀬D1制作)

<講義要旨> 「通態的」風土論で試みる近代の超克

人間の主体性・主観をなおざりにしたまま3世紀以上を走り続けた近代パラダイムは、大きな矛盾を抱えるに到っている。すなわち、地球上の人類の持続可能性が、近代の進歩の結果によって脅かされているのである。

矛盾をのりこえる試みはどのようになされてきたのだろうか?和辻の論は主観的決定論の域を出ないながらも、「近代空間」に対する「風土」を取り上げる慧眼を示した。西田は人間活動を「述語化」と呼んで、主体としての人間を強調した。ドイツの動物科学者・エクスキュールは、〈Umwelt〉「(周りの)世界」を〈Umgebung〉「(客観的)環境」と区別することで、「近代空間」の唯一性を打ち破る画期をなした。

こうした先達の論を礎に、「通態的」な風土論を打ち立てることが、今こそ求められている。

通態的風土論は、理念的には、主体・客体を峻別する近代の二元論を超越して、両者のあいだに「通い」を見る。技術体系を通じて世界の涯てにまで「外部化」された人間身体は、象徴体系を通じて「戻る」。空間的には、普遍的・均質的な「近代空間」ではなく、特殊的・多質的な「風景」こそが重要だ。生態学的基盤をふまえた風景(「真」なる風景)、社会的公正を体現する風景(「善」なる風景)は、「美」なる風景として立ち現れる。そうでない風景=「殺風景」な風景は、この「真」「善」「美」を満たさない。

風土論が指し示すわれわれの進むべき道は、風景と同じく、自らの「真」を意識した=人類所与の条件をふまえた生活様式・文明を再構築することだ。それは自ずと「善」にして「美」なるものとなろう。人類が限られた地球という共通基盤の上で生き続けようとするならば、近代を乗り越えるこうした風土論の試みが必要なのだ。

仙道英美江秘書 ひび巨役熱演!



舞台女優でもある仙道秘書は、9日から12日まで劇団「40CARAT」第15回公演「ギリギリ王国の憂鬱」(謎めいた作品)に出演、一人三役をみごとに熱演して拍手を浴びました。初日に西村教授も観劇しました。工学畑の研究室にこのようなアーティストが執務とは含蓄があります。(半年前の公演については本誌3号で報じました。この劇団は94年の旗揚げです。
<http://www.40carat.com>

編集後記

水を打ったような141講義室だった。ベルク特別講義は「雨の中、みなさん」と「前日行った本郷まちあるき」についての感謝の辞から始まった。「徹夜」という言葉もあった。それから近代の限界と超克を切々と説かれたが、わが研究室の研究・実践は、近代の超克にかけるベルク博士の心を打ったのだった。とまれ、本誌創刊の年は、大野村はじめ各地域プロジェクト、部活、イタリアワークショップ、そしてベルクイベントの沸騰で暮れていく。(酒井)